第二回リレー小説「梅雨」二番手

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　奥入瀬しゆ

「つゆ風邪にかかっちゃって」

雫は申し訳なさそうに笑う。

「ごめんね」

　雫はソファから立ち上がり、僕から顔をそむけた。僕はつゆ風邪についてよく知らない。ここ最近で見つかった奇病とだけ聞いている。

「それってどんな病気なの？」

　雫は答えなかった。だから、雨音だけが部屋に響いた。気になってはいるけど、無理に問い詰めるつもりもない。

「アセロラジュース、買ってこようか」

　実家から送られてきたものだったから、同じものが買えるかは分からない。でもざくろジュースよりはいくらかマシなんだろうな、と思った。

　雫は首を振って声を絞りだした。涙声だった。

「もう長くないって。あと雨が十日ふったら、泡になって消えちゃうの。うつらないから、それだけは心配しないで」

　熱を出した。風邪予防はしていたつもりだったのに。つゆ風邪はうつらないのだから、ただの自己管理不足だ。

「これ食べて」

　雫がおかゆをつくってくれたらしい。僕の口にスプーンを押し付けて、雫は僕の顔をのぞきこんでいる。

「ありがとう」

　おかゆはあったかくて、やわらかかった。ぼーっとした頭でぼーっとした味のおかゆを食べて、もっとぼーっとしてしまう。

「薬も飲んで。眠くなるから、ぐっすり寝て」

　雫の言うとおり、僕は眠くなってしまった。だけど寝てる場合だ、とは思わないのだ。

「眠くないよ。外に連れて行けやしないけど、お話くらいならできると思う」

　雫は僕の額を小突いた。

「ばーか」

　優しげな声だ。ふわっとしみ込んで、僕はどんどんうとうとしてしまう。

「ばーか」

　負けじと言い返してみる。次に気が付いたら深夜だった。僕が重い体を起こすと、ベッドに倒れ込むようにして雫が寝息を立てていた。

　僕はタオルケットを雫の背中にかけると、大きく深呼吸をした。息を吐くときに咳き込んでしまったので、うがいをしに水道へ向かう。

　その日はもちろん、雨が降っていた。

　大学の講義を自主休講することにした。熱は引いていたけど、咳が治まらなかった。

「学校には行かないの？」

「病人に無理させないでよ」

「みゃー」

　雫は威嚇するように鳴いた。僕は取り合わず、うがいをしてのど飴を口に放り込んだ。

「みゃー」

　それでも雫が鳴き止まないから頭を撫でてみる。しかし雫は僕の手を振り払って、大きく伸びをした。

「相変わらず雨だなぁ」

　雫はそれだけ言ってソファに倒れ込んだ。

「雨でも傘があるよ？」

　僕は雫に声をかけながら、外出の支度をした。雫が外出したいとも限らないけれど。

もうすぐ泡になって消えるらしい雫。消えることと、僕のところに転がり込むことは結びつかない。実は、雫は僕の部屋に来た理由を話していない。

でも、そんなときに僕を頼ってくれたというのなら、力になれれば良いと思った。

「散歩しよう」

　僕が提案すると、雫は穏やかに鳴いた。

「にゃー」

　さほど強くもない雨だった。傘は一つしかなかったから、僕が持って二人の上で掲げている。

路地を歩いていると、アジサイがあった。雫はアジサイを指さしながら言う。

「毒があるんだよ」

「じゃあ舐めちゃいけないね」

　行く当てなく、雫が向かう方に進んだ。狭い道を抜ける。大通りでは車がびゅんびゅん走っていて、タイヤが水溜まりを飛び散らせた。

「あてて」

　雫は水を被って、嬉しそうに笑った。

「こういうのは好きだな」

　僕はよく分からなかったので、「そっか」とだけ呟いた。

　つゆ風邪とただの風邪を併発してもいけないので、僕たちは家に戻った。雫にシャワーを浴びさせて、服は洗濯した。

　雫は、持ち出してきた服と僕の服を気紛れに着る。本人の服がぬれてしまったので、今回は僕の服を貸した。

「ぬくい」

　風呂場から出てきた雫はそんなことを言って、僕の隣に座りこんだ。僕たちは何も言わず、しばらく座っていた。

　雨は止まないのだった。

　僕は映画を見せてやることにした。パソコンにディスクをセットして、ソファにふたり並んだ。僕が好きな、でも悲しい映画だ。

　二時間が経って、僕はすやすやと寝ていた。

「よかった。幸せで」

　そんな声が聞こえて、目が覚める。僕は雫の方に寄りかかっていたらしい。体をぐてんと預けたままで、言ってみた。

「幸せ？　僕は救いようのない話だと思ってたけど」

「そんなものを私に見せたの？　悪趣味」

　雫はなじるような目で僕のことを見つめた。

「でもいいよ。私はいい話だと思ったから」

　主人公の少年は、つくられたまがい物。ロボットだ。ある母親が失った息子の代わりにオーダーした製品だ。しかし失われたはずの息子が戻り、母親は偽物の少年を捨てる。捨てられた少年は旅をして、二千年を経る。母親の愛を求めるようにプログラミングされた、少年のお話だ。

　もちろん、そんなものは手に入らずに結末する。

　雫は僕の肩に手をかけて言った。

「案外、子供だよね」

「誰が？」

　雫は含み笑って、せいせいそーと叫んだ。

　その日の雨が止んだのは、もう夜もたけなわといった時間だった。雨が止んだことに雫は喜んでいたけれど、すぐに眠ってしまった。

ぐうすうと眠りだした雫をよそに、僕は床に倒れて天井を見上げる。電気を消して、真っ暗闇の中でぐでんと横たわってみる。

　途方に暮れていた。

　何がどうしたいのか分からなかった。雫が、ではなく僕が、だ。雫がどうなろうと、僕のこれからは続いてゆくと思う。けれど雫がいなくなったら悲しいはずだ。でも、だからって、何ができるというのか。

　ざくろジュースを飲む。なかなかに酸味が利いていて美味しい。この味が駄目な雫に子供と言われるのは、なかなかどうして納得がいかない。

　あれから二日、雨が降ったわけだ。

　自分の体温を測ると、三六度九分。微熱、と言えるか言えないかといったところ。しかし気だるい。体が重い。何をしたいとも思えなかった。人が泡になって消えるなど、訳が分からない。

　スマートフォンを使って、つゆ風邪について調べた。

「つゆ風邪にかかった患者は、およそ十五日から二十日ほどの雨の後、泡になって消えてしまいます。治す手立ては見つかっていません」

　雫の告白した話は、嘘ではなかった。疑ってはいなかったけれど、嘘であったなら。

　無機質なアラームの音が響く。雫はあわてて飛び起きると、スマートフォンを取り出した。

「もひもひ」

　呂律がまわっていない。まぶたも上がっていない。しかししばらくやりとりを続けて、雫は目を見開いた。

「お母さん？」

　そこから先の雫は、真剣な顔で受け答えをした。真っ暗な部屋の中で、スマートフォンの画面と雫の瞳だけが光を放つ。

「ここにいるのがばれた」

　電話を切るなり、雫は呆然と呟く。

「明日、迎えにくるって」

「まぁそうだろうね」

　雫は明らかにあたふたしていた。みーと鳴いて、むーと鳴いて、めーと鳴いた。

「もう一度だけ訊くけど、雫はどうして僕のところに来たの？」

「つゆ風邪が……」

　へどもど言う雫を遮って、僕は雫の本音に足を踏み込む。

「もうすぐ消えるからここに来たって論理的じゃない。もうすぐ消えちゃうって分かって、どうしてここに来たの？」

　雫は毛押されたようにひるんで、や！　と叫ぶ。僕はしばらく待った。

　少し経って、雫は意を決したのか。ゆっくりと、小さく唇を開いた。

「看取ってほしい人がいるから、ここに来たの」

　なら、と僕は思った。やることができて、嬉しくなる。

　気取っていえば、旅を始めることになるだろう。いつの間にやら小雨がちらついて、星のまったく見えない夜空だった。

「もう眠いかも知れないけどさ。最期くらい頑張ろう」

「眠くないぴょん」

　僕が笑うと、雫は怒った。